

富士山周辺におけるアオナシの再発見（池谷祐幸<sup>a</sup>, 間瀬誠子<sup>a</sup>, 渡辺長敬<sup>b</sup>, 中込司郎<sup>b</sup>, 佐藤義彦<sup>a</sup>）

Hiroyuki IKETANI<sup>a</sup>, Nobuko MASE<sup>a</sup>, Nagayoshi WATANABE<sup>b</sup>, Shiro NAKAGOMI<sup>b</sup> and Yoshihiko SATO<sup>a</sup>: Rediscovery of *Pyrus ussuriensis* Maxim. var. *hondoensis* Rehder from the Vicinity of Mt. Fuji

アオナシは中井猛之進博士と菊池秋雄博士により、当初は新種 (*Pyrus hondoensis* Nakai & Kikuchi) として1918年に発表された。基準産地は長野県傍陽村（現真田町）と静岡県須走村（現御殿場市）であった。両産地とも近年は分布が確認されず、現在では絶滅したと思われていた。このうち後者を含む富士山周辺では、菊池博士らの採集した標本 (TI) の他にも、牧野富太郎博士が1920年前後に富士山及び箱根で採集した標本が MAK に現存するが、その後の標本記録はなかった (Iketani and Ohashi 2003)。

筆者の一人渡辺は、2003年7月に山梨県富士山周辺地域の三ッ峰山山頂付近でアオナシと思われる2個体を発見した。また、渡辺と中込は山中湖周辺においても1個体を発見した。これらの報告を受け、池谷らは2004年9月に現地調査を行い、これらがアオナシであることを確認した。

三ッ峰山のアオナシの自生地は、山頂から西南部へ伸びる稜線の西側に広がる、オオバギボウシやヤグルマソウなどが群落をなす草原である。2個体は共に高さ約10 m、胸高直径約40 cm であり、西向き斜面上に50 m ほど離れて生えている。また、山中湖の1個体は湖の南側の別荘開発地で、既に建築物がある中であるが、開発以前から存在するミズナラ等の樹木がかなり残されている。この個体も大きさ（樹高約 6 m、胸高直径約20 cm）から見て植栽されたものではないと思われる。

これら3個体は共通して、葉柄および葉の裏面の中肋及び側脈上に赤褐色の毛を密生しており、特に7月の標本では著しい。この特徴は牧野博士が富士山で採集した標本 (Makino s. n., 1920, MAK) でも見られる。また TNS の標本を再調査したところ、三ッ峰山からは同様の特徴を持つ標本が採集されており (S. Okuyama s. n., 5 June 1949, TNS)，これもアオナシと同定できた。こうした赤褐

色毛の多い個体は、現在アオナシが最も多く見られる八ヶ岳周辺でも出現するがやや希である。富士山周辺の個体群は、隔離と小集団化によりこの形質の頻度が高まった可能性が考えられる。

ところで原発表の後、富士山周辺からは葉が小さく短枝が刺状になる形のアオナシが採集され、これはコアオナシ (*Pyrus hondoensis* var. *microphylla* Nakai & Kikuchi) として記載された。このため、この地域のアオナシをすべてコアオナシと見なす見解もあった (松山 1930)。しかし、TI に現存する 5 点の標本のうち、原記載に書かれた「葉身長 1–3 cm」という特徴を持つのは 2 点 (Kikuchi nos. 3, 4) のみであり、他の 3 点は葉身長は最大で 5–6 cm 程度である。今回調査した 3 個体も、葉身の最大長は 4–7 cm 程度であり、コアオナシにはあたらない。コアオナシのような形態は、アオナシの若木や株の根元からの萌芽枝などで普通に見られるものである。TI の標本はすべて花や果実をつけておらず、こうした部位から採集されたものと思われる。

今回再発見されたアオナシは僅かに 3 個体である。これらは皆果実を付けており、ナシ属植物が一般に強い自家不和合性を持つことを考えると、周囲に別個体が存在する可能性は否定できないが、いずれにせよ現存個体はごく僅かであると思われる。なお、この 3 個体からは穂木を採取し、果樹研究所において生育地外保存をはかっている。また証拠標本は TNS おく。

*Pyrus ussuriensis* Maxim. var. *hondoensis* (Nakai & Kikuchi) Rehder in J. Arn. Arb. 2: 59 (1920), p. p.; Iketani & H. Ohashi in J. Jpn. Bot. 78: 127 (2003).

*Pyrus hondoensis* Nakai & Kikuchi in Bot. Mag. Tokyo 32: 34 (1918).

*Pyrus hondoensis* Nakai & Kikuchi var.

*microphylla* Nakai & Kikuchi in Bot. Mag. Tokyo **33**: 199 (1919).

Voucher and other specimens examined: JAPAN. Honshu, Yamanashi Pref.: Fujikawaguchiko-machi, near the summit of Mt. Mitsutogeyama (N. Watanabe 03033, 22 July 2003, TNS; H. Iketani, N. Mase & N. Watanabe 3572, 3573, 7 Sept. 2004, TNS); Yamanakako-mura, Hirano (H. Iketani, N. Mase & N. Watanabe 3574, 7 Sept. 2004, TNS); Mt. Fuji (T. Makino s. n., 1920, MAK 225855). Mt. Mitsutogeyama (S. Okuyama s. n., 5 June 1949, TNS 80485, 80486). Shizuoka Pref.: Mt. Fuji, Ipponmatsu (A. Kikuchi nos. 1–4, 12 June 1918, TI; Yamade s. n., July 1918, TI).

Recently, wild populations of *Pyrus ussuriensis* Maxim. var. *hondoensis* Rehd. were thought to be extinct in and around Mt. Fuji. Recently, a few wild trees are found around the summit of Mt. Mitsutogeyama and near the Lake

### Yamanaka-ko in the Mt Fuji area.

本研究の現地調査は農林水産ジーンバンク事業植物部門の国内探索収集として行われた。

本研究にあたり、入林許可を頂いた山梨県富士河口湖町及び山梨県吉田林務環境部、および所蔵標本の閲覧を許可頂いた標本館に感謝いたします。

### 引用文献

Iketani H. and Ohashi H. 2003. Taxonomy and distribution of Japanese populations of *Pyrus ussurien-sis* Maxim. (Rosaceae). J. Jpn. Bot. **78**: 119–134.

松山 篤. 1930. 本土産野生梨アヲナシに就いて. 千葉高等園藝學校戶定會學術彙報 **1**: 17–27, pls. 1–12.

(<sup>a</sup>農業・生物系特定産業技術研究機構果樹研究所,

<sup>b</sup>山梨県植物研究会)

### 福島県にイトイバラモを記録する（薄葉 満）

Mitsuru USUBA: A New Record of *Najas yezoensis* Miyabe (Najadaceae) for Fukushima Prefecture, Japan

イトイバラモは、Miyabe and Kudo (1931)によって記載された沈水性の水生植物で、北海道と本州にまれに分布する日本固有種である。本州では、青森、秋田、山形、神奈川各县に記録があるがそれぞれ生育地は限られ、環境庁レッドデータブック (2000) では絶滅危惧 IA 類 (CR) にランクされている。これまで福島県には記録がなかったが、筆者は2000年8月に耶麻郡北塩原村の檜原湖から本種を採集した。

檜原湖は、奥羽山地の標高819 m の高原上に位置し、面積約10 km<sup>2</sup>、最大水深31 m に及ぶ貧栄養湖である。1888年に磐梯山が噴火し、その岩屑流によって河川が堰き止められてできたもので、湖としては歴史が浅い。南側の泥流地形上にはアカマツ林、東側の平坦地には耕地や草原もあるが、周囲の大部分はブナ、ミズナラ林に被われている。1931年7月の吉村信吉による観測では、表層水の温度は19.1 °C、pHは6.6、透明度は7.5 m であった (福島県 1966) が、2002年7月の福島県

生活環境部による観測では、湖北部における水温は19.3 °C、pHは7.1、透明度は5 m とされている (福島県生活環境部 2004)。湖岸線は入り江が多く、最北岸、中央部東西岸および最南端の西岸に遠浅な部分があり、そこに沈水植物を中心とした水生植物群落が発達している。

2000年8月25日、檜原湖北岸の金山地区を調査した折、水深0.3–1 m の湖底から、草高5–15 cm の多分枝するイバラモ科植物を採集した (Fig. 1)。ホッスモに似ているが、全体深い緑色で葉鞘の上端が耳状に突出せず、種子表面の網目模様が縦長であることからイトイバラモと同定した。しかし、慎重を期して、その後東洋実業株式会社植物研究部の野口達也氏に標本を送り、イトイバラモに相違ないことを確認していただいた。2002年9月12日には、北部の金山地区、檜原地区および中央部西岸の細野地区の浅瀬などでも確認され、湖の広い範囲に生育していることが分かった (Fig. 2)。生育場所の湖底は礫質から砂泥質